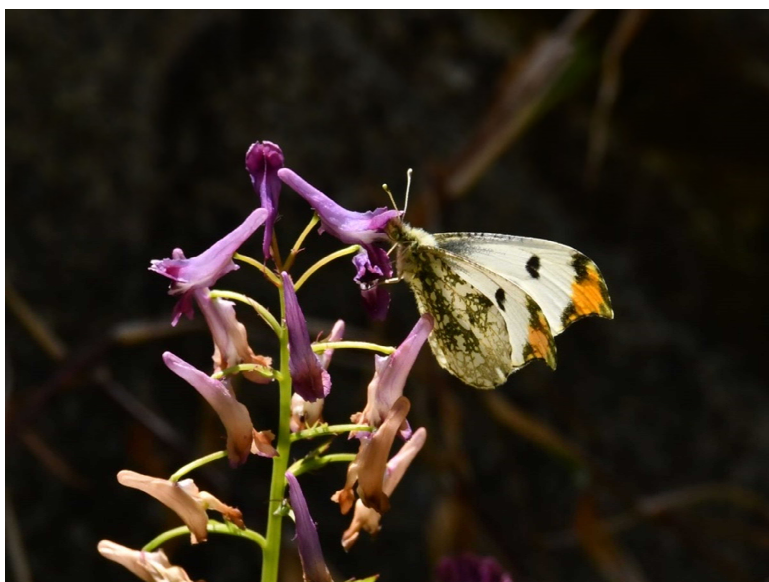


2-5 チョウ（蝶）類の記録

平成23年（2011年）から行っている昆虫類調査記録の中で、チョウの仲間に注目し、できる範囲で確認を行ってきました。なお、令和2年からは、これらチョウの確認を強化し、市内で生息する可能性がある種類を様々な環境で探索しました。



チョウは、両生類と同じく、環境変化によりとても影響される分類であるため、重要な指標動物になります。近代は日本で絶滅や、激減した種類が数多く見られる中で、東京都は特に、都市化が目立ち、大気汚染や植生環境の貧弱なども深刻な地域であると言えます。その結果、複数種類が絶滅してしまい、絶滅危惧種も多くなりました。

本報告書では、これまでに記録したチョウの年毎の確認表を公開し、その期間で感じられた変化や重要な種類について紹介します。

種類の確認方法は、捕獲を行っておらず、目視、または双眼鏡や望遠カメラで確認を行っています。また、場合によっては成虫や幼虫以外に、卵（フジミドリシジミ）や食痕（クロマダラソテツシジミ）のみで確認した種類があります。

結果、これまであきる野で確認できたチョウは86種類で、その中では22種類は指定種で、内5種は絶滅危惧種です。また、あきる野市周辺で生息密度が低いとされる多くの森林性のシジミチョウの種類を確認することは困難で、市内で生息していると思われる数種類は残念ながら現在も未確認です。そして、タテハチョウの仲間の多くは草原性の種類であるため、近年は、市周辺の草原環境の減少や悪化と共に激減した種類が目立ちます。一方、温暖化の影響により、南方系のチョウは増加中であるため、種類の入れ替わりという現象が起きている部分も認められます。

平成23～令和7年（2011年4月～2025年3月）のチョウの確認表

No.	科名	種名	H 2 3 年 (2 0 1 1 年)	H 2 4 年 (2 0 1 2 年)	H 2 5 年 (2 0 1 3 年)	H 2 6 年 (2 0 1 4 年)	H 2 7 年 (2 0 1 5 年)	H 2 8 年 (2 0 1 6 年)	H 2 9 年 (2 0 1 7 年)	H 3 0 年 (2 0 1 8 年)	R 元 年 (2 0 1 9 年)	R 2 年 (2 0 2 0 年)	R 3 年 (2 0 2 1 年)	R 4 年 (2 0 2 2 年)	R 5 年 (2 0 2 3 年)	R 6 年 (2 0 2 4 年)	R 7 年 (2 0 2 5 年)
1	セセリチョウ	ミヤマセセリ <i>Erynnis montana</i>	○			○	○			○	○	○	○	○	○	○	○
2		ダイミョウセセリ <i>Daimio tethys</i>	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
3		アオバセセリ <i>Choaspes benjaminii</i>	○						○		○		○				○
4		ギンイチモンジセセリ <i>Leptalina unicolor</i>											○				
5		コチャバネセセリ <i>Thoressa varia</i>									○	○	○	○			○
6		ホソバセセリ <i>Isoteinon lamprospilus</i>					○					○			○		○
7		ヒメキマダラセセリ <i>Ochlodes ochraceus</i>		○				○			○	○	○	○	○	○	○
8		キマダラセセリ <i>Potanthus flavus</i>			○						○	○	○			○	○
9		オオチャバネセセリ <i>Polytremis pellucida</i>		○						○		○	○			○	○
10		ミヤマチャバネセセリ <i>Pelopidas jansonis</i>											○				
11		チャバネセセリ <i>Pelopidas mathias</i>								○		○	○			○	○
12		イチモンジセセリ <i>Parnara guttata</i>	○	○		○	○		○	○		○					○
13	アゲハチョウ	ウスバシロチョウ <i>Parnassius glacialis (citrinarius)</i>	○?	○			○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
14		ジャコウアゲハ <i>Byasa (Atrophaneura) alcinous</i>	○	○						○		○				○	
15		ホソオチョウ <i>Sericanus montela</i>														○	
16		アオスジアゲハ <i>Graphium sarpedon</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17		ナミアゲハ <i>Papilio xuthus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18		キアゲハ <i>Papilio machaon</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19		モンキアゲハ <i>Papilio helenus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20		クロアゲハ <i>Papilio protenor</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21		オナガアゲハ <i>Papilio macilentus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22		ナガサキアゲハ <i>Papilio memnon</i>			○							○				○	○
23		カラスアゲハ <i>Papilio bianor (dehaanii)</i>		○		○	○	○	○	○		○	○		○	○	○
24		ミヤマカラスアゲハ <i>Papilio maackii</i>	○	○	○		○	○	○		○	○					○
25	シロチョウ	キタキチョウ (キチョウ) <i>Eurema hecabe (mandarina)</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

No.	科名	種名	H 2 3 年 (2 0 1 1 年)	H 2 4 年 (2 0 1 2 年)	H 2 5 年 (2 0 1 3 年)	H 2 6 年 (2 0 1 4 年)	H 2 7 年 (2 0 1 5 年)	H 2 8 年 (2 0 1 6 年)	H 2 9 年 (2 0 1 7 年)	H 3 0 年 (2 0 1 8 年)	R 元 年 (2 0 1 9 年)	R 2 年 (2 0 2 0 年)	R 3 年 (2 0 2 1 年)	R 4 年 (2 0 2 2 年)	R 5 年 (2 0 2 3 年)	R 6 年 (2 0 2 4 年)	R 7 年 (2 0 2 5 年)
26		ツマグロキチョウ <i>Eurema laeta</i>													○	○	
27		モンキチョウ <i>Colias erate</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28		ツマキチョウ <i>Anthocharis scolymus</i>											○	○		○	○
29		モンシロチョウ <i>Pieris (Artogeia) rapae</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30		スジグロシロチョウ <i>Pieris (Artogeia) melete</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	シジミチョウ	ムラサキシジミ <i>Narathura (Arhopala) japonica</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32		ムラサキツバメ <i>Narathura bazalus</i>												○	○		
33		ウラゴマダラシジミ <i>Artopoetes pryri</i>											○	○	○		
34		アカシジミ <i>Japonica lutea</i>					○	○		○			○	○	○	○	○
35		ウラナミアカシジミ <i>Japonica saepestriata</i>				○	○			○	○		○	○	○		○
36		ウラクロシジミ <i>Iratsume orsedice</i>												○	○	○	○
37		ウラミスジシジミ <i>Wagimo signatus</i>												○	○		
38		ミズイロオナガシジミ <i>Antigius attilia</i>					○				○		○	○	○	○	○
39		メスアカミドリシジミ <i>Chrysozephyrus smaragdinus</i>											○	○	○		
40		オオミドリシジミ <i>Favonius orientalis</i>	○										○	○	○	○	○
41		エゾミドリシジミ <i>Favonius jezoensis</i>												○	○		
42		フジミドリシジミ <i>Sibatanoizephyrus fujisanus</i>												○			○
43		コツバメ <i>Callophrys ferrea</i>		○			○					○	○	○	○	○	○
44		トラフシジミ <i>Rapala arata</i>		○							○		○	○	○	○	○
45		ゴイシシジミ <i>Taraka hamada</i>										○	○	○	○	○	○
46		ベニシジミ <i>Lycaena phlaeas</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47		ウラナミシジミ <i>Lampides boeticus</i>						○			○	○	○	○	○	○	○
48		ヤマトシジミ <i>Pseudoizeeria maha</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49		ルリシジミ <i>Celastrina argiolus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50		スギタニルリシジミ <i>Celastrina sugitanii</i>		○								○		○		○	○
51		ツバメシジミ <i>Everes argiades</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

No.	科名	種名	H 2 3 年 (2 0 1 1 年)	H 2 4 年 (2 0 1 2 年)	H 2 5 年 (2 0 1 3 年)	H 2 6 年 (2 0 1 4 年)	H 2 7 年 (2 0 1 5 年)	H 2 8 年 (2 0 1 6 年)	H 2 9 年 (2 0 1 7 年)	H 3 0 年 (2 0 1 8 年)	R 元 年 (2 0 1 9 年)	R 2 年 (2 0 2 0 年)	R 3 年 (2 0 2 1 年)	R 4 年 (2 0 2 2 年)	R 5 年 (2 0 2 3 年)	R 6 年 (2 0 2 4 年)	R 7 年 (2 0 2 5 年)	
52		ムシャクロツバメシジミ <i>Tongeia filicaudis</i>																○
53		クロマダラソテツシジミ <i>Chilades pandava</i>															○	
54		ウラギンシジミ <i>Curetis acuta</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
55	テングチョウ	テングチョウ <i>Libythea celtis (lepita)</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
56	マダラチョウ	アサギマダラ <i>Parantica sita</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
57	タテハチョウ	カバマダラ <i>Danaus chrysippus</i>										○						
58		オオウラギンスジヒョウモン <i>Argyronome ruslana</i>											○					○
59		メスグロヒョウモン <i>Damora sagana</i>				○		○					○	○				
60		クモガタヒョウモン <i>Nephargynnis anadyomene</i>			○	○	○	○?				○	○	○	○	○	○	○
61		ミドリヒョウモン <i>Argynnis paphia</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
62		ウラギンヒョウモン (サト型) <i>Fabriciana adippe (F. pallescens)</i>					○						○			○	○	○
63		ツマグロヒョウモン <i>Argyreus hyperbius</i>	○			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○
64		イチモンジチョウ <i>Limenitis camilla</i>				○	○				○	○		○	○	○	○	○
65		コミスジ <i>Neptis sappho</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
66		ミスジチョウ <i>Neptis philyra</i>					○					○				○		○
67		サカハチチョウ <i>Araschnia burejana</i>	○			○	○	○		○		○	○	○	○		○	○
68		キタテハ <i>Polygonia c-aureum</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
69		ヒオドンチョウ <i>Nymphalis xanthomelas</i>		○		○	○	○		○	○		○	○	○	○		○
70		ルリタテハ <i>Kaniska canace</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
71		アカタテハ <i>Venessa indica</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
72		ヒメアカタテハ <i>Cynthia (Vanessa) cardui</i>		○			○			○	○			○				○
73		スミナガン <i>Dichorragia nesimachus</i>	○		○	○	○		○				○				○	○
74		コムラサキ <i>Apatura metis</i>														○	○	
75		ゴマダラチョウ <i>Hestina japonica (persimilis)</i>					○								○			○
76		アカボシゴマダラ <i>Hestina assimilis</i>	○		○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
77		オオムラサキ <i>Sasakia charonda</i>	○	○	○	○	○	○	○?	○		○					○	○

No.	科名	種名	H 2 3 年 (2 0 1 1 年)	H 2 4 年 (2 0 1 2 年)	H 2 5 年 (2 0 1 3 年)	H 2 6 年 (2 0 1 4 年)	H 2 7 年 (2 0 1 5 年)	H 2 8 年 (2 0 1 6 年)	H 2 9 年 (2 0 1 7 年)	H 3 0 年 (2 0 1 8 年)	R 元 年 (2 0 1 9 年)	R 2 年 (2 0 2 0 年)	R 3 年 (2 0 2 1 年)	R 4 年 (2 0 2 2 年)	R 5 年 (2 0 2 3 年)	R 6 年 (2 0 2 4 年)	R 7 年 (2 0 2 5 年)
78		ヒメウラナミジャノメ <i>Ypthima argus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
79		ジャノメチョウ <i>Minois dryas</i>									○	○					
80		ヒカゲチョウ <i>Lethe sicelis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81		クロヒカゲ <i>Lethe diana</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
82		サトキマダラヒカゲ <i>Neope goschkevitchii</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
83		ヤマキマダラヒカゲ <i>Neope niponica</i>		○				○				○	○				
84		ヒメジャノメ <i>Mycalesis gotama</i>										○	○	○			○
85		コジャノメ <i>Mycalesis francisca</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86		クロコノマチョウ <i>Melanitis phedima</i>	○						○	○		○	○	○	○	○	○

これまでの調査で確認できた 86 種類中の 28 種類（全種類の 32.6%）は調査期間の各年に確認し、あきる野の普通種の代表であると言えます。ナミアゲハ、クロアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ムラサキシジミ、ベニシジミ、ルリシジミなどのチョウはそのグループの例です。

18 種類（全種類の 20.9%）は全期間の半分以上、全期末満の年数で確認したため、これらも普通種～やや普通種になります。発生の季節が短いことや、他の条件により各年は記録できなかったと思われますが、通常は各年に安定的に発生し、それなりによく見られる種類と言えます。その中、ミヤマセセリ、カラスアゲハ、アカシジミ、コツバメ、ミドリヒョウモン、イチモンジチョウ、サカハチチョウ、ヒオドシチョウ、オオムラサキなどのチョウは代表ですが、アカボシゴマダラのような外来種も含まれています。

記録期間の上半期は調査不足のため、様々な種類の情報量は若干薄いですが、ツマキチョウ、ミズイロオナガシジミやトラフシジミのようなチョウも上記のグループに含まれると思われます。これらは、調査期間の半分以上の年数で確認した 40 種類（全種類の 46.5%）のグループであると、確認できる機会は比較的に少ない種類です。実際には、森林性のオオミドリシジミやウラクロシジミ、またはウラゴマダラシジミ、ゴイシシジミ、メスグロヒョウモン、ウラギンヒョウモンやミスジチョウのようなチョウはこのグループの代表的で、数はやや少なく、分布も限られていると見られます。

最後に、1～2 年しか確認できなかった 11 種類（全種類の 12.7%）のグループは、偶発と見られるカバマダラ以外に、ミヤマチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリ、フジミドリ

シジミ、オオウラギンスジヒョウモン、ジャノメチョウなど、または南方系のクロマダラソテツシジミや外来種のホソオチョウになります。その中で、時期や活動時間帯が短い上で、活動範囲は樹上を中心に行う森林性のシジミチョウの多くは、そもそもあきる野市周辺では個体数も少ないため、確認は極めて困難です。令和4年（2022年）にあきる野での初確認となったエゾミドリシジミはその中の一種ですが、発見して直ぐに都内のナラ枯れのピークに至ってしまったため、エゾミドリシジミの主な食草であるミズナラが大幅に枯損してしまいました（少なくとも市内のその7割の樹木）。その後、エゾミドリシジミを確認することができなくなりました。同様に、ウラナミアカシジミ、ウラミスジシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミ、または市内で生息すると思われるアイノミドリシジミもミズナラ、コナラやクヌギなどに依存するため、ナラ枯れの影響を受けて減少したと思われます。

＊上記のミヤマチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリ、カバマダラやオオウラギンスジヒョウモンの詳細は、令和元～3年度の森林レンジャー活動報告書で報告済。

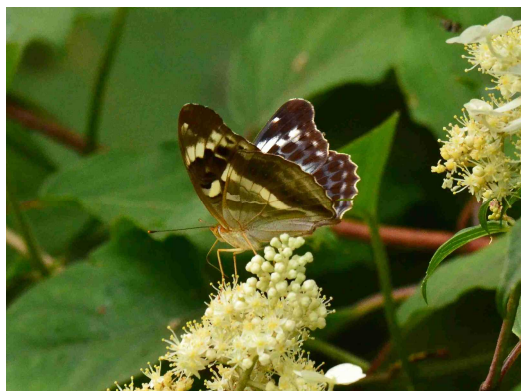
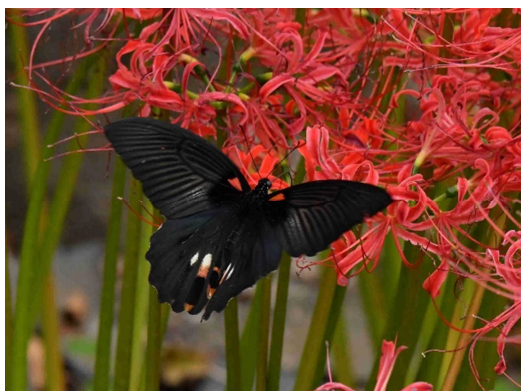
予想外の例もあります。20世紀末に、都内で一度絶滅したとされていたツマグロキチョウは近年に都内東部で復活し始め、その数年後あきる野でも確認できるようになりました（令和5・6年）が、現時点で、市内においては単発的な発生に限る可能性があります。

また、令和4年の8月下旬に一度だけ、ムモンアカシジミと思われるシジミチョウを市内の山地で目撃したことがあります。確定できなかったため、このデータには含まれていません。

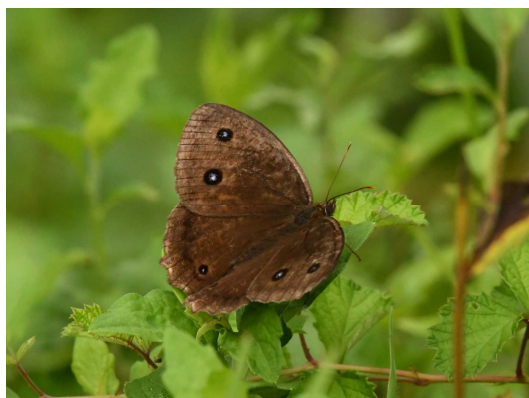
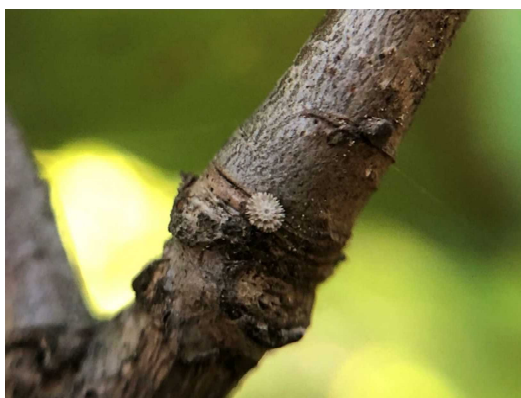
以上、年毎の確認に限らず、目撃回数から、近年は明らかに増加中の種類が見られます。外来種のアカボシゴマダラの他にも、南方系のナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモンやクロコノマチョウ、またはそもそも数が多かったムラサキシジミ、ウラギンシジミ、テングチョウ、コムスジやヒメウラナミジャノメなどは増加傾向にあると考えられます。これらに関しては、温暖化や、現代の植生環境は有利な条件になっていると思われます。その他にも、令和6年（2024年）から新たに確認した外来種のムシャクロツバメシジミは、園芸種が豊富であるマンネングサの仲間に依存するため、今後も普通種になる可能性が高いと思われます。一方、近年見られなくなっているメスグロヒョウモン、ヤマキマダラヒカゲやジャノメチョウのように、山地の草原や健全で明るい森林などの環境の消失、またはニホンジカなどの採食圧を原因に減少傾向にあると思われます。

終わりに、東京都レッドリスト（本土部）2020年版で絶滅と指定されているヒメシロチョウ、クロシジミ、シルビアシジミやウラギンスジヒョウモンは20世紀後半までに市内でも生息していたとの報告があり、他にも、ヤマキチョウやキベリタテハなどのような種類も生息していたようです。人間活動の影響で起きた絶滅種の例が多く、この先は環境の悪化の進行を防ぎながら絶滅種を増やさないことは重要な課題です。環境の消失、温暖化やシカの採食圧など以外に、人間による採集などの影響も挙げられるため、哺乳類や鳥類と同様に、爬虫類、両生類や昆虫類などのような小動物全般の保全に寄り添う法律の強化、または保全区域の拡大が必要である時代になりました。

今後もチョウ類の生息状況においてさらなる変化が起きると推測し、市内の環境保全などに関わる情報として、引き続きの観察やデータの蓄積を行う必要があると考えています。



秋に姿を現す南方系のナガサキアゲハ（左）と、市内で確認はできなくなっているメスグロヒョウモン（右）。種類別での増減が激しいと言えます。



ナラ枯れの影響を受けている生き物の中で、ミズイロオナガシジミのようにコナラなどの樹木に依存している森林性のシジミチョウが減少傾向にあると思われます。木に卵（左）を産み付けてから羽化までの時間は長く、その間に木が枯れることで被害を受けやすい種類です。（右）市内において出現はかなり珍しいジャノメチョウ。これまでは、市の奥山の高標高の森林のギャップで3回のみ確認しましたが、好む草原環境が減少したためか、令和2年以降は全く見られません。



森林レンジャーあきる野新聞

Vol.170 2025年5月号
発行：森林レンジャーあきる野（ハプロ）

初夏を迎えるあきる野の自然 ～ 巡り巡る生き物たち



ゴールデンウィークの頃からは、新緑のピークです。同時に、多くの夏鳥の飛来や、多くの昆虫類の出現やランなどの花、「かわいい、かわいい、面白い」生物が沢山現れる季節です！

4月下旬からは既に代表的なオオルリ、キタキ（上の写真）、ツツドリ、クロツグミなどの野鳥が山地でさえずり始めていました。姿が見えなくても、鳴き声を聴くのもベストシーズンです。



山の溪谷などでは、ヒメクロサナエ、カラスアゲハ、アオバセセリやトラフジミなどカラフルな生き物が飛び回ります。一言で、最高です！

また、その年の気候条件などにより、確認できる物に変化はありますが、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、エビネ（右の写真）などのランの仲間が林床から「顔」を出して綺麗な花を咲かせます。＜ちなみに、盗掘はやめましょう～。自然から消えてしまいます。持って帰った株は確実に枯れますよ！＞

こんな時期なので、あきる野の自然豊かなハイキングコースでは出会いが強いのです。御岳沢（左上の写真）のロックガーデンや大岳沢のコースは代表的な山道で、鳥類、尾根、戸倉三山や金比羅尾根の山もおすすめします。




新たな侵入者 (◎v◎) あなたの庭にもいるかも??



2月下旬、厳しい寒さが一段落して、連日ポカポカ陽気に包まれた中、とある畑の隅で、点々と探り飛行で移動するシジミチョウがいました（写真）。春のこの頃に見かけ始めるスキタニリシジミなどの小さなシジミチョウの仲間ですが、よく見ないとほとんどが同じ種に見えます。「あれ？ ヤマトシジミっぽいけど違うな…」と近付いてよく見てみると、「ムシヤクロウバメシジミじゃないか！」

ムシヤクロウバメシジミは、あきる野では初確認となりますが、昨年までは神奈川のあちこちで確認されていると情報が出回っていたので、そろそろあきる野にも現れるだろう、と気にしていた種類の一つです。中国原産の外来種で、温暖化や、食草であるベンケイソウ科の植栽などにより、卵や幼虫が運ばれ、分布を拡大しています。同じく、昨年は南方系のクロマダラシジミやシンジュキンカワガが大量発生しました。

温暖化と共に増えていく様々な生き物。次は何でしょう？

これぐらいが実物大ですよ～



そして、他の蝶の話

あきる野産のアサギマダラ

寒さに強く、遅くまで活動する蝶として知られているアサギマダラは、秋にふわふわと風に乗り、標高の高い場所まで上昇しながら南下する姿がとても印象的です（下の写真）。山梨県の山地で数十個体が集まる場面を見た覚えもあります。

実は、あきる野でも産卵→孵化→幼虫→羽化→成虫のサイクルが出来ていて、発生地の一つとなっています。しかも、温暖化(?)の影響により、幼虫の姿で越冬できるようになっています。食草のキジョランの分布も決め手となりますが、これも分布拡大中かも知れません。

幼虫は、ウミウシのように白い姿です（右の写真）




トラフジミの魅力

トラフジミは、この時期の美しい蝶の一つです。体は小さいですが、通羽は止まる時に翅を開くための、綺麗なオレンジ色の斑点としましま模様が見えます。稀に翅を開く時は、表がピカッと見えてきます。まさに、大変美しいコバルトブルーそのものです！

この蝶は、里山環境、明るい沢や森林など、自然が豊かな環境であれば、時々見かけるやや普通種です。しかし、よく探さないと偶然出会うことは少ない種だともいえます。と云いながら、あきる野の住宅街でも見かけたことがありますので、皆さんも自分の園によく目を向ければ、会えるかも知れません。



自然満喫は注意深く！




ハイキングなどのハイシーズンに突入しますが、せっかくの楽しい一日が事故に終わらないように、きちんと準備を行い、野外活動は常に周りによく注意してお過ごしください。

- △ 頭上に枯れ木やかかり木などの枯損木はありませんか？
- △ 近くにクマや毒蛇などの危険な野生動物はいませんか？
- △ この川に入っても本当に大丈夫ですか？
- △ 天気の前兆の心配はありませんか？
- △ その草地にマダニはいませんか？

→ などなどです！！





東京都あきる野市